

文芸

◆俳句

午後三時奥座敷まで冬日差す 池田 逸子
 一人居に馴れしと書かる賀状かな 伊藤 敬子
 如月や戦後久しき三勇士 伊藤 定男
 出湯宿窓一面の梅の紅いづか 今関満喜子
 畦道に一日ひとつ春が来る 魚地 照子
 里山の音無き雨や春隣 江森 悦子
 春寒や浜に千魚の焼く匂ひ 川島 孝夫
 如月や児を背に一枚羽織けり 川島 通則
 ジョギングのテンポを狂わす梅の花 桑名 大行
 初春や愛の兜を床の間に 向後 寛
 如月に晴耕雨読夜のしじま 越川 義則
 味噌汁の湯気立ち上り寒の入り 小松 藤男
 終電の灯り遠のく去年今年 佐瀬 輝夫
 誘わる、旅に二の足踏む二月 鈴木とし子
 少年の夢のせ風の舞ひ上がる 玉虫 栗扇

如月の空の誘ふ旅心 土屋 義昭

春寒や背筋真直ぐとはいかず 戸村 静華

汽車の窓みちのくの町冬淋し 長谷川正子

日あたりの良き縁側や福寿草 早川 勇

野草鞋凍て解けみちの修行僧 山口 一秋

紅梅や空紺碧に偕楽園 山口 とし

寒見舞母から七味唐辛子 渡部 和秋

◆短歌

裸木は冬の光に雲母きららなす 佐瀬 初音
 光を放ちさやぎるるなり 初音
 霜を置く鉢の中なるクロッカス 芹川 初子
 芽の出で初めて季は巡りぬ 初子
 冬麗ら日向ぼっこでぼっかぼか 中山 芳子
 心の中までぼっかぼか 芳子
 風荒ぶ夜半に目覚めて暫くを 池田 春江
 庭を吹きゆく音を聴きあつ 春江

冷え込みの厳しきけふは夜の庭に シリウス星を仰ぎるにけり 西山満里子

嬰兒は握り拳も笑つてる 八角 三枝

深き笑窪を五つ浮かべて 三枝

左千夫賞戴く老いたる我を案じ 吉岡 信子

娘は付き添ふと遠くより来ぬ 信子

里巡る循環バスは定刻に 押尾 輝子

なじみの客乗せ街へと向ふ 輝子

大寒の庭に早くも咲きそめて 鈴木まさ子

臘梅すがしき香り放てり 尚美

妹が土産にくれし生姜葛湯 尚美

心も身をも温めくれたり 尚美

皮靴に閉ぢ込められし足の指 島田ますみ

帰宅と共に羽を伸ばせり ますみ

朝六時刻違ふなく一番機 斎藤つね子

吾家の上を成田へ向ふ つね子

大霜の積石の窪紫の花 越川 福子

かそけくもすみれ一本 福子

ほのぼのと明け行く里は 土屋 好

こうほう博物館

vol.12

栗山川土手のチューリップ

ようやく春の暖かさが感じられるようになってきた。弥生三月、栗山川の土手を散歩していると、草叢の中に、白く点々と咲く花を見ることが出来ます。よく見ると、花を少し大きくしたような花容で、数輪ずつまとまって咲いています。

これは学名「チューリップ・エドゥリス」日本のチューリップとも呼ばれ、葉・茎を食べると甘みがあるところから和名アマナ(甘菜)というユリ科の球根植物です。早春に細い葉を出し、暖かくなつた頃に花茎を伸ばし、一〜二輪の花を咲かせます。

そして花が終わると他の草に埋もれ、夏には葉も枯れて休眠に入ります。同じユリ科で同じような生活をするカタクリは、花が桃紫色で目立つところからよく知られていますが、アマナは

あまり目立たず人知れずひっそりと咲いています。しかし、群落になってたくさん咲いている様子は、遠めに見ると一面、白い花畑のようになり、春のひと時、その存在を示します。このアマナもごたぶんにもれず、県によって絶滅危惧種に指定しているところもあり、次第に少なくなっています。ぜひ早春の栗山川の土手を散歩しながら、貴重な山野草となりつつあるアマナの花を探してみたいかがてしょうか。



▶ 白い花を咲かせた「アマナ」